

## 関連学会印象記

# 第67回米国心臓学会 (AHA)

野上 昭彦\*

第67回米国心臓学会 (American Heart Association; AHA) が、1994年11月14日より4日間ダラスで開催された。本会は米国の心臓学会の年次総会であるが、ほぼ世界的な心臓病学の学術集会といっても過言ではない。また他の国際学会のような『年に1度のお祭り』的色彩は少なく、まさに学術本位の学術集会といえる。今回の応募演題数は11154題でほぼ半数は米国内、半数は米国外の応募であったという。採択演題数は3598題で平均採択率は32% (例年と同等) であった。ここ数年の傾向であるが、基礎的な研究、特に分子生物学に関連した演題が目立ち、臨床研究的な演題は少なくなっている。筆者の印象では、臨床関係の演題の採択は年々難しくなっているように思われる。

さて、学会の中身であるが、心臓病学のすべてを網羅した内容であるため、すべてを把握することは不可能である。筆者自身、専門の不整脈以外のセッションにはほとんど参加できなかった。したがって、この紙面では不整脈に関連した演題の報告が中心になってしまうことをお許し願いたい。

虚血性心疾患に関しては、冠動脈硬化のメカニズム、PTCA後の再狭窄とその治療、とくに遺伝子治療の試み、また血栓形成抑制のためのトロンピン阻害薬に関する研究などが話題となっていた。とくにPTCA後の再狭窄については、基礎の分野でも興味ある対象らしく、基礎・臨床の双方から議論がなされた。

心不全に関しては、ACE阻害薬、 $\beta$ 遮断薬の評価に関する演題が多く認められた。またNOに関しては、血管トーンに与える影響、平滑筋細胞増殖に関わる影響、なども発表された。

不整脈に関しては相変わらず、最近のトピックであるカテーテル・アブレーションに関係した演題が多かった。しかし、副伝導路に関する演題はすでにそのピークを過ぎた感があり、やや低調であった。副伝導路に関する新たな発見としては、左心房心耳から左心室へと向かう新しい副伝導路

の存在などがあった。房室結節回帰頻拍のに関しては多数の演題があった。とくに古くて新しいテーマともいえる房室結節の生理学に関する演題が数多く認められた。房室結節のslow pathwayの速位付着部位はfast pathwayとは異なり、His束の内部であることが示唆され、またslow pathwayはpathwayというよりもむしろ“network”と言った方が適切なものであるとの発表があった。また房室結節回帰頻拍のカテーテル・アブレーションに際しては完全なるslow pathwayの切断を得られなくても頻拍が根治することが発表された。心房細動に関しては、ついに心房細動に対する根治治療としてのカテーテル・アブレーション法が報告された。これは心房細動に対する手術療法“Maze”手術のカテーテル・アブレーション版であるが、今後さらに簡単なアブレーション方法が開発されるものと確信している。心室頻拍に関しては非虚血性心疾患に合併する心室頻拍に関してはある程度高い成功率とその機序、アブレーション成功の電位などが発表された。一方、虚血性心疾患における心室頻拍に対する成功率はまだ低く、それを解決する一法として中川博ら (Oklahoma 大学) はアブレーション・カテーテルの先端電極を生食で灌流し、心内膜の接触面温度を下げ、そのかわりに高出力で心筋内温度を高度に保つ saline irrigation ablation catheter system を発表した。本演題は臨床心臓病学部門の young investigator awards の finalist の一つとして選ばれた。他に心室頻拍の話題としては、心臓電気生理学検査とホルター心電図法の有用性を比較した大規模臨床試験 (ESVEM) の報告がなされた。心臓電気生理学検査とホルター心電図法の有用性はほぼ同等と認められたが、cost effectiveness を考えた場合ホルター心電図法のほうがよりよいと結論された。また薬物療法には sotalol が他の薬剤と比較して有効性、cost effectiveness も高いと判定された。不整脈源性右室心筋症 (ARVC) の治療については、抗不整脈薬が有効ならばそれによる治療で長期予後も良好で、反面

\*群馬県立循環器病センター 循環器内科

カテーテル・アブレーションあるいは手術療法では短期成績は良好なものの、長期予後は不良であることが発表された。発表者は薬剤抵抗性で高危険群の不整脈源性右室心筋症には植え込み型除細動器が適応となるとしている。植え込み型除細動器に関する発表でも cost effectiveness が問題となった。心筋梗塞後の心室頻拍・心室細動の患者における治療を植え込み型除細動器、外科手術、薬物療法の3群に分けて検討すると、cost effectiveness が高いのは植え込み型除細動器植え込み

であり、一方、薬物療法群は予後不良であったという。

以上、今回(1994年)のAHA総会のごく一部に関して振り返ってみた。いつもAHAに出席して痛感することは、この学会は独創的で優れたアイデアであるなら、たとえ症例数が少なくてもその演題は採択されることが多い、ということである。今後、独創的なアイデアでさらに日本人が活躍することを祈る。